

令和7年度 学力向上指導改善プラン

学校教育目標 豊かな心で、自ら考え行動できる子の育成

目指す子どもの姿 主体的に学ぶ意欲を持ち、つながりを活かし学びを深める児童、お互いのよさを認め、相手を思いやれる児童、自分や相手の体・健康を大切にし、ねばり強くやり抜く児童

変容を目指す資質・能力 a 知識及び技能 b 思考力、判断力、表現力等 c 学びにむかう力、人間性等 d 情報活用能力 e 課題解決能力 f 学び続ける姿勢 g コミュニケーション能力

三田市立狭間小学校
学校長 村岡 智行
研究主体【学力向上推進委員会】

前年度		継続性	4月 (※全国学力・学習状況調査の結果などを受けて年度途中で変更する場合は削除、追記部分を赤字で修正)		2～3月 年度末評価			
学力向上に向けた重点的な目標	年度末評価 (前年度の成果と次年度に向けた課題等)		学力向上に向けた重点的な目標 (変容を目指す資質・能力)	成果となる目標 (指標となる数値等)	具体的な行動目標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)	教員評価 (今年度の成果と来年度に向けた課題等)	評価	
個別最適な学び・協働的な学びを意識した授業の確立	○ホワイトボードやタブレット等の活用によって多様な授業形態を取り入れることができた。少人数グループで話し合ったり、タブレットで考えを交流したりすることで、個人・集団の思考を深めていけるようにした。 ◆めあてをもって学習に取り組むことはできたが、ふりかえりの視点や方法については学校全体での共通理解が不十分である。	B	個別最適な学び・協働的な学びを意識した授業の確立(a・c・d・e・g)	①めあてに沿った学びの振り返りをもとに自己調整力を評価する。 ②主体的な学びに重点を置き、課題設定の工夫、効果的な言語活動、相互交流等授業展開を工夫することで、学校教育評価アンケート(児童)の「学習(授業)に進んで取り組んでいますか」の項目で肯定的評価が前年度を上回ることを目指す。	・めあてに沿った振り返りの視点や方法について全校で共通理解をして取り組むことで、何ができるようになったのかメタ認知し、自己調整する力を養う。 ・どの授業においても、個々が何を、どの手順でどのように学ぶのか、めあて・見通しをもって粘り強く学べるようにする。 ・指導補助員やがんばり学びタイム指導員らと連携し、児童個々の課題を明確にし、個別最適な学びを進める。 ・学校司書と連携し、各教科の中で活用できる本(資料)を提示、学習活動に広がりを持たせられるよう支援する。	3.0	○研究授業でめあての立て方や振り返りの仕方について、全校で共通理解ができ、自己調整力を教師も子どもたちも意識することができている。 ○学校教育評価アンケート(児童)の「学習(授業)に進んで取り組んでいますか」の項目では、肯定的評価が前期は前年度より若干低かったものの、後期は前年度より約3%上回っていた。個別最適な学びを進めていくことで、子どもたち自身が学習に前向きに取り組むことができていることがうかがえる。	B
思考力・表現力の育成	○各学年の各教科における掲示物の文章表現や言葉の使い方に対して、多くの子どもが興味を示している。 ○朝会で全校生に発表をする機会をどの学年も年2回以上取中で、どの子どもも相手意識を持って表現する力が伸びてきている。	A	思考力・表現力の育成(b)	研究テーマ「学びをつなぐ子どもの育成～活用を中心とした授業展開～」での研究を継続して深め、考えるための技法を先生だけでなく子どもたちも使えるようにしていくことで、思考力を伸ばしていく。 朝会での発表の機会は、昨年度に引き続き今年度も同様に取り組み、表現力の育成につなげる。 以上のことで学力テストの国語「思考力、判断力、表現力等」の「A 話すこと・聞くこと」と「C 読むこと」と算数「思考・判断・表現」で全国平均を超えることを目指す。	・年間に全職員が研究授業を行い、事前研修と事後研修を持つことで研究を深める。さらに、年に3回講師を招聘し、助言をいただくことで、研究が前に進むようにする。事後研修は、ワークショップ形式で行うことで活発に意見が出るようにし、授業づくりが深まるようにする。 朝会等での発表の後、感想を聞いたりふりかえりを行うことで、自分の表現の評価とし、表現力を高めるようにする。	3.0	○研究授業では、事前研修で活発に議論することができ、どの研究授業も、活用を意識し思考力を伸ばす授業をつくることができていた。また、校内研修会に講師の先生を招聘することで適切な助言をいただくことができ、めあての立て方やふりかえりの仕方等、研究を深めることができた。 ○学力テストの結果は、国語「A 話すこと・聞くこと」は1.5ポイント全国平均を下回ったが、国語「C 読むこと」と算数「思考・判断・表現」は全国平均をそれぞれ1.5ポイントと4.1ポイント超え、取組の成果がうかがえた。	B
家庭学習の習慣の確立と充実	○「漢字ノートコンクール」や「算数ノートコンクール」さらに今年度は「自主学習ノート」の取り組みを全校生や保護者が目にする場所に掲示することで、他者のがんばりを認め、自分の学びに活かそうとする意欲につながった。 ◆学校教育評価アンケートの、「子ども自らが家庭学習に取り組む」は、61.0%であり、今後も家庭と連携を図る取り組みをし改善を図っていきたい。	B	家庭学習の習慣の確立と充実(c・f)	・児童が家庭学習においても、主体的に学ぶ力を伸ばしていくことを、家庭学習の目標にする。 ・学校教育評価アンケートの、「子ども自ら家庭学習に取り組む」の項目で66%以上を目指す。	・家庭学習の指標として、家庭学習の手引き「夢に向かってはさまっ子」を活用し、自主学習でどんな内容をどんなふうに学習したらよいか、学年に応じた方法を児童に具体的に示し指導する。 ・2～6年はタブレット端末を使った家庭学習において、ドリル学習に取り組むだけでなく、調べ学習や自主学習などにも活用できるように指導していく。	2.4	○学校教育評価アンケートでは、「子ども自ら家庭学習に取り組む」についての肯定的な評価がほぼ66%に達していた。自主ノートを掲示したり、漢字ノートを掲示したりするなど、家庭学習の取り組みを評価する活動の積み重ねが、これらの結果につながっていると考えられる。 ○3年生以上では、タブレット端末の持ち帰りを、原則として毎日行うようにしており、家庭学習に活かすとともに、児童の情報活用能力を伸ばすことにもつながっている。	B
児童理解に基づいた指導体制の確立	○活用を意識した問題解決学習を行うことで、児童は学んだことを生かしながら主体的に学習に取り組んでいた。 ○年2回の児童理解研修会で全職員が児童一人ひとりを共通理解する機会をもった。加えて毎月の職員会議や委員会など、あらゆる機会をとらえ、児童の様子や変化を共有し、深い児童理解に努めた。 ◆来年度、目指す子ども像をさらに具体的に研究を進めていく。	A	児童理解に基づいた指導体制の確立(a)	年2回の児童理解研修、年3回の巡回指導などを通して児童理解を深め、小中連絡会を学期に1回(年3回)開催する。	・児童の実態に応じて個に応じた支援を行い、指導方法について助言をいただいて、授業改善を進めていく。	2.9	○児童理解研修会で全職員が児童一人ひとりを共通理解する機会をもった。加えて巡回指導で指導方法の検討を行い、授業改善を進めてきた。また、毎月の職員会議や委員会など、あらゆる機会をとらえ、児童の様子や変化を共有し、深い児童理解に努めた。 ◆今後も、職員のニーズに合った研修テーマを設定し、日々の教育活動に生きる研修計画を立て、実践していく。	B
社会に開かれた教育課程を支える風土の醸成	○地域の方にミシンボランティアとして学習支援をしてもらうことができた。また、図書ボランティアによる定期的な図書室の環境整備や読み聞かせ活動を実施できた。 ◆地域ボランティアと学校をつなぐ、コーディネーター的な人材を今後も探していく。一方で、地域の支援が必要な場で、その都度地域や保護者をお願いしていくことも大切にしたい。	A	社会に開かれた教育課程を支える風土の醸成(c・g)	①地域ボランティアと連絡を密に取り、相互に効果が生まれる連携を行い、広い分野で多くの学校支援ボランティアの活用を推進する。 ②中学校を見通した、基礎学力の向上や中学校への円滑な移行を図る。 ③小中一貫教育の推進(カリキュラム連携、相互校の実情理解、児童会生徒会交流、生徒指導情報共有など)をする。	・ボランティアとの交流を、単元構想に位置付けて、年間を通して計画的に行えるようにしていく。 ・コーディネーター的な地域人材を発掘する。 ・学校運営協議会において地域人材の活用について協議する。そして、必要な役割について確認していく。 ・小中交流週間を実施し、お互いの授業見学を行い、円滑な小中接続に努める。また、教師間での合同研修を実施し交流・連携を進める。	2.3	○地域の方にミシンボランティアとして学習支援をってもらうことができた。また、図書ボランティアによる定期的な図書室の環境整備や読み聞かせ活動を実施できた。また、3年生の環境学習でフイブイの森クラブの方にも学習支援いただいた。 ○児童の学校生活の様子を行事や授業見学を通して見ていただき、学校運営協議会にて児童や学校運営について意見交流することができた。 ○教科担任制を高学年で実施できた。小中一貫カリキュラム作成に向けて、公開授業週間を設定し、小中で授業を参観し合い自分たちの指導に生かすことができた。また、中学校による出前授業で、生徒会から中学校生活について話を聞くなど、進学に対して安心することができた。 ◆地域ボランティアと学校をつなぐ、コーディネーター的な人材を今後も探していく。一方で、地域の支援が必要な場で、その都度地域や保護者をお願いしていくことも大切にしたい。	B

○「教員評価」は教員対象に実施した自己点検調査結果(0～4の5段階評価)の平均値
○「評価」は年間の取組みについて、4段階で評価
A・・・十分に達成 B・・・おおよそ達成
C・・・達成が不十分 D・・・ほとんど達成できず